
言語研究センター共同研究

韓国語の漢語動詞の受身文のデータの整備

尹 亨 仁・文 彰 鶴

近年大学における韓国語のレベルは非常に高くなっている。それを押し上げている要因として、韓国ドラマの影響、韓国への旅行、韓国人との交流、韓国への短期留学などが挙げられる。

こういう変化の中で、韓国語を履修している学生を悩ませている大きな問題の1つが韓国語の受身文である。韓国語の受身文は3つの方法、7つの接辞の付加によって作られる。7つの接辞の付加は、本動詞の語種（固有語か漢語か）、統語的特

徴（2項動詞なのか、3項動詞なのか）、さらに意味的特徴（被害を被るという意味を帯びているか否か）などによって分かれるなど、その派生は複雑な様相を呈している。そのため、「子どもに泣かれる」「近所の人に騒がれる」「息子に死なれる」など、自動詞文でも受身文を作ることができる日本語の環境の中で育った日本語母語話者にとって韓国語の受身文を理解、使いこなすということは至難の業である。

日本語と漢語語幹を共有する漢語動詞の受身文の場合は、語幹に「-되다(doeda)」・「-받다(badda)」・「-당하다(danghada)」の3つの接辞が付加されるが、この3つとも付加できる場合と1つしか付加できない場合がある。このように、漢語動詞によって受身接辞が異なるため、典型的な動詞を用いて説明するだけではその違いが学生に十分に伝わらない。そのためには、全体の傾向がつかめるリストを見せながら説明を試みた方が効果的であると思われる。

現在、『デイリーコンサイス韓日・日韓辞典中

型版』（三省堂、2010）を参考に「頻度の高い韓国語の漢語動詞」のリストを作っている。「頻度の高い漢語動詞」を選ぶ作業として、韓国で最も読まれている文学賞作品集の『李箱文学賞受賞作品集』の2001年から2010年までの10年間の作品に目を通し、用いられている漢語動詞を拾い上げている。2011年3月までに、500語程度の漢語動詞のデータが整備される見通しである。頻度を3段階に分ける、構文情報も入れるなどして、2011年度の韓国語の中級および上級の授業で活用できるようにしたい。
